

「カナエール」

中学二年 T・H

先日、私は父とともに、港区にあるニッショーホールという講堂施設に行きました。「カナエール」というイベントに参加するためです。

カナエールとは、児童養護施設に在所していた子供たちに対し、退所後、専門学校や大学等へ進学することを奨学金で支援するプロジェクトです。ただ、奨学金を得るためには、条件があります。それは、みんなの前で、就学する目的や、卒業後の夢をスピーチで宣言すること。スピーチコンテストの形式をとり、参加者や審査員がもっともすぐれたスピーチを最優秀賞などとして選びますが、最優秀賞や優秀賞に選ばれたからといって奨学金の金額は変わりません。

このコンテストへの出場が認められた時点で、出場者（カナエルンジャーと呼ばれます）には、同額の奨学金が支給されることとなります。カナエルンジャーには、彼らをボランティアとして支える3人の大人たちがいます。彼らは、それぞれ、「メンター」「マネージャー」「クリエーター」という役割があり、カナエルンジャーがコンテストの本番で話す内容を作り上げる事を120日間にわたってサポートします。自分の夢を語るカナエルンジャーと、それをサポートする3人の大人たちはチームとして、このコンテスト当日を迎えます。父の知人が、このコンテストの運営をボランティアとしてさえていらして、今回、ご招待いただきました。

私は、児童養護施設と聞いて、初めはあまり良いイメージをもてませんでした。幼少時から壮絶な虐待を受けたり、経済的に不安定で餓死寸前の状態だったり、施設に入所する子供たちは一人一人、さまざまな問題を抱え、彼らの経験は彼らの闇そのもの、そう思っていました。

でも、自分の過去に向き合い、みんなの前でスピーチする彼らは、前を向いて、堂々としていました。一人一人が施設に入所してから、たくさんのことを吸収し、考え、経験したエピソードをみんな一生

懸命、メッセージとして訴えていました。その真剣な眼差しには、いくつもの葛藤を乗り越えた強い決意と自立が感じられました。

入所する前も、した後も、自分が経験した苦しみ、辛さは自分にはわからない、誰も理解できない、と考えていた男の子は、あるとき、自分のことを必死に考えてくれ、一緒に悩み、思いを共有しようとしてくれていた施設の職員の姿に気づき、少しずつ、変わっていくことができたと言って、職員の方々への感謝の言葉を口にしながらかきました。闇に包まれた心に光を差してくれたとあって涙を流しました。

また、何人かのカナエルンジャーは、自分を生んでくれた母親への感謝の言葉を述べていました。自分を生んだ後、施設に入れることになったことへの葛藤や悩みを理解し、許し、感謝する、そういう思いを会場の参加者に訴えていました。

「生んでくれて、ありがとう」と言っていました。私は、その言葉は、簡単そうでないながら、本当に難しい言葉だと思いました。でも、自分を施設に入れた母親を最初は恨み、今は許せるようになったと話す彼らはみんな、輝いて見えましたし、そういう思いをもてるようになった彼らの歩んできた道を考えると涙がこぼれました。

もしかすると、何不自由なく育ってきた私のような子供に比べると、彼らはスタートダッシュに遅れたと感じているかもしれませんが、でも、私は、彼らは私なんかより、何十倍ものスピードで成長し、生きていると感じました。これから、彼らはこの大会を通じて奨学金を得て、社会に飛び立ちます。最初は戸惑い、もがき、苦しむかもしれませんが、このカナエルンジャーが助走の役割を果たし、その助走はしっかりと踏めている、だから絶対大丈夫だと私は確信しました。孤独に打ち勝ち、不安や恐怖に押しつぶされそうになっても、周りを手をつなぐ心の余白が彼らにはある、と感じました。何より、舞台の上で自分の夢、これからの人生に挑むにあたっての宣言を話す彼らはみんな、輝いて見えました。

「人間には変わるための期限日などない。努力し続ければ、いつ

だって変わることができない」「すぐに努力は実らなくても、変わりたい自分に近づく事が出来る」「生まれ育った環境は違っても、みんな同じ人間で、平等だ。不利、有利なんてない」・・・。

私は、彼らの精一杯の言葉に心を動かされ、背中を押された気持ちがありました。私には、彼らのようなはっきりとした夢や目標はありません。でも、彼らの言葉を聞き、感じたことはあります。

それは、人間として生まれたからには、その環境や境遇によって有利、不利などが生じるべきではないということです。誰でも、自分がこうなりたいという夢をもつことができ、自分の理想を少しづつでも叶えていくことができる社会、私はそういう社会をつくっていくことに貢献したいと思いました。